

悪夢のソ連抑留

和歌山県 出口 爲治郎

昭和二十年濱江省哈爾濱第十八野戦兵器廠二六三五部隊の教育隊で三か月の教育を受け、中滿北滿西滿を転々と、最後に伊利久得興安領の山奥に小さな兵舎、樋口小隊長以下十九人の兵隊だった。彈薬庫と滿人勞務者の警戒警備の歩哨の本務についてた。

一カ月後、ソ連の偵察機が激しくやって来る。本部隊からの命令で全員引き揚げ出發準備しろ、今ソ連軍は北東西からと侵入して来ている。今関東軍は攻撃されたり交戦しているとの連絡があったと小隊長が言われた。いよいよ今夕出發だ。伊利久得滿鉄本線路上を南下、昼間は山中で一休みをしながら、背には二十キロばかりの食衣彈丸、九九式小銃帶剣を持てるだけ戦うのだからというものの、後退が目的で交戦はやめろであった。

我々二十人の兵隊ではなすすべもなかった。三日目

だったか、他の大隊は激戦を交えているとニュースが入った。二六三五部隊は海倫綏化に集結、夜の行軍。目的地不明、貨車に乗りまた行軍とあって、八月十九日、富拉爾基病院に到着、ここで武器の返却、戦争は負けた。

天皇からの言葉、無条件降伏したとラジオで聞いた。関東軍は涙をのみ、体も骨抜けた思い、昨日まで敵軍だったソ連軍は今日から我々の監視で、肩に連発銃をかけたソ連の兵隊が、人員の点呼と、我々にダワイスカレーの一言で、追いたててのだった。いよいよ出發、リュックを担いで広い野原の道、夕方から朝まで行軍。たどり着いたのはチチハル野砲隊であった。

ここですばらく滞在。お世話になった元野砲隊の先輩たちにお礼申し上げる。チチハルを出發、何十キロか行軍、榆樹屯で野原にテント張り、十五日も野宿、十月初旬だのに初雪が降って来た。貨車の準備もできたのだから、真夜から乗車、翌日出發、西を向いているのに、内地に帰るのだとのデマが飛ぶのだった。

三、四時間も走るとまさにソ連領。俺たちはなぜソ連

領土に狭い箱の中にとじ込められ、先輩たちは四、五年も満州に送られ、子供が三、四人もありながら、戦いに負けたというものの、こんな遠いシベリア鉄道に乗せられるとは納得のいかない話だ。列車は走る走る。古いガタガタの貨車だから揺れる揺れる。腹が減るのはあたり前、ソ連は黒い酸っぱいパンが主食で、粟のかゆと千島で捕れた干魚が副食だが、我々に与えられた。こればかりで生きていけるだろうか心配される。

列車は相も変わらず檜、杉林の中を西へ西へと走り続けるのであった。もうバイカル湖を過ぎて何日になるだろう。若い俺たちの顔の血色が衰えて来ている。入浴も忘れ一か月ぐらい、垢がいっぱいこびりついている。貨車の中ではシラミとり、狭い箱に三十人に近い兵隊が、退屈でマージャンパイをつくる者、将棋をうっているもの、ストーブの当番、昼も寝言を言う者、歌を歌っている者さまさま。もう満州を出て二十日にもなろうか。夕暮れ、いよいよ自分たちの目的地に到着と連絡が入った。かなりの大きな町だと思った。ここに下車、第一、第二収容所があって、俺たちは第二に分かれ、六百人の

兵隊が入れられた。

おちつかないのに三日目、職場に出かけ、自分たちの中隊は鑄物工場と土木建築建設の二つで、私は工場の一角にトンテンカン、ソ連人の爺さんと二人でかじ屋をやった。これもきびしいノルマー一〇〇%の目標だった。時には工場で鑄造仕事もした。愈々シベリアに冬がやって来た。このアルマータ都市は中国の西端、シベリアでも暖かい処だと聞いていたが、十二月に入って零下二十度、時には三十度の日もあった。

街の郊外を離れると、広い砂漠からつめたい風と砂ぼこりが吹いて来る。年輩者の兵隊は血液のめぐりが悪く、凍傷と云う恐ろしい病魔、手足の切断と云う不幸、悲観のあげく、首吊り自殺する者も度々あった。雪が積り、死体をフンドシ一枚で屋外に山積されるのだった。可愛そうに兵隊はただ腹が減って、夜も眠れぬ日もあり、昼の黒パンは朝に食って終い、昼はハンゴの蓋に八分日スープ一杯で、夕食まで辛抱しなけりゃならない。こんな毎日で、朝は朝星、帰りは夜星、シベリアの夜は長かった。

静かな夜、窓にお月様はきれいな鏡餅に見えるのだった。これも飢餓線上だから知る実感だろう。四十四年経過した今、収容生活を思い出して、なにごとか悪夢がよみがえる。シベリアの空気が凍ってキラキラ輝いていた。あれは何だったか、今まで知らなかった。テレビで細氷現象を知った。

抑留二回目のお正月が来た。ぜんざいを戴いた夢を見た。もう一杯食べたかった。明けてもただ思う事、腹一杯食べたい、帰り度の思う事ただ一つ、ソ連に連れられて兵隊は笑顔を見る事はなく、本質的には空腹と、切実な未来に不安感と云う圧力が、重くのしかかっていたのだ。

ソ連に来て暖かく成ると、野草を摘んで、やたらと湯がいて食べ、毒草の混入で命を亡くした者も多く見られた。特にアメリカ赤痢が大流行し、わたしもその一人だった。

アルマータ地で夏に女は裸足が見られ、きれいな娘さんが道を歩き乍ら、手鼻を飛ばす姿も珍しくなく、又我々日本のソルダート、腰に缶詰缶をぶらさげているの

が珍しげに眺めていた。

私たちの大隊長以下は、軍隊ありきところと同様にいつまでも階級を続行、一般下士官兵隊より食事の量は少しは多かった。集団生活をやっている中で、こういう規律が私には納得できなかったのである。

二十二年の夏が来ようとしている。私は健康診断の結果(お尻の肉)二級でダモイが言われた。自分の中隊から百人、各収容所混成でダモイ列車で二十五日間、ナホトカに向かった。ナホトカ浜で一週間の訓練にて、引揚船恵山丸、舞鶴入港、日本看護婦、日本婦人会の皆様の出迎えでこのときのうれしさは今もなお脳裏にやきついている。

同胞の骨拾わねば

高知県 東山 林

ソ連抑留の体験を書いた書物は、個人的なものから団体等で発刊したものが数多くあるし、その内容も、極限